

家庭の機能に関する一考察（その1） —高校生対象の調査より—

A Study on the Function of the Family. (No. 1)

—Concerning with High School Student's View of the Family.—

田口 かおる

Kaoru TAGUCHI

はじめに

家庭とは家族が寝食をともにし、共同して経済生活を営む生活の場である。そこには、家族員や社会に対して果たす役割やはたらきがあり、これを「家庭の機能」と呼んでいる。「家庭の機能」は家庭を構成する家族員の状況によって、また、時代や社会の変化によって、その内容と質は変化していくが、現代の一般的機能としては、(1)人間の基本的必要の充足、家族相互の愛情の交換、睡眠・休息・食事の必要の充足、(2)経済生活の維持、(3)家族の保護・教育と文化の伝達、(4)心理的安定（特にこの機能は社会が複雑多岐になればなるほど、その必要性が重視される）¹⁾、などがある。現在、社会の進展によって家族外部に種々の機能集団が発達し、食事、教育、娯楽の機能など多くの機能が社会化している。しかし、愛情、生殖、養育、休息などの機能は依然として家族の機能であることに変わりはなく、大人の情緒的な安定と子どもの社会化につながる重要な機能であるといえる。そこで、変化する社会の中で、今家庭に求められていることは何か、を知るために家庭のスタートでもある結婚について考え、これからの家族問題について検討した。本研究では高校生の結婚観に焦点をあて、調査した結果を考察することにした。

調査方法

2001年5月に東京都内の私立高校1～3年に在籍する生徒199人に対して、記述式の質問調査（表1）を実施した。対象者の男女の内訳は男子83人、女子116人で、平均年齢は男子15.54歳、女子15.69歳であった。

調査結果

1) 結婚希望の有無

「将来結婚したい」の回答は、女子68%、男子71%で男子の方がやや上回っている。「結婚したくない」の回答は、女子3%であったのに対し、男子は8%で男子の方がやや高い結果であった。「結婚しても、しなくても、どちらでもよい」の回答は、女子28%、男子19%で女子の方が上回っている（図1-1、図1-2）。

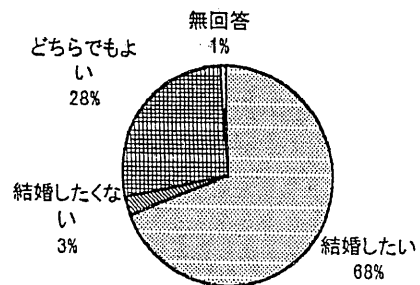


図1-1 結婚希望の有無（女子）

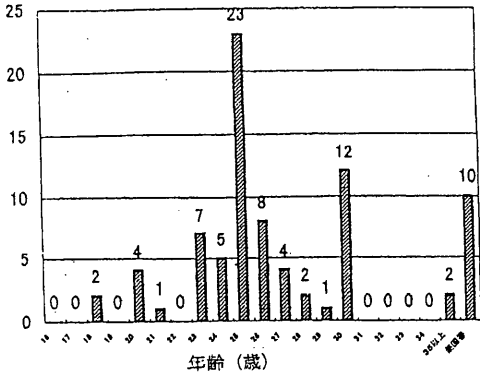


図2-2 結婚希望年齢（男子）

3) 配偶者を選ぶ際に重視すること

配偶者を選ぶ際に最も重視することは、男女とも「性格」、次いで「愛情」となっているが、その次に重視するものとして、女子は「経済力」、男子は「家事能力」「容姿」となっている（図3-1、図3-2）。

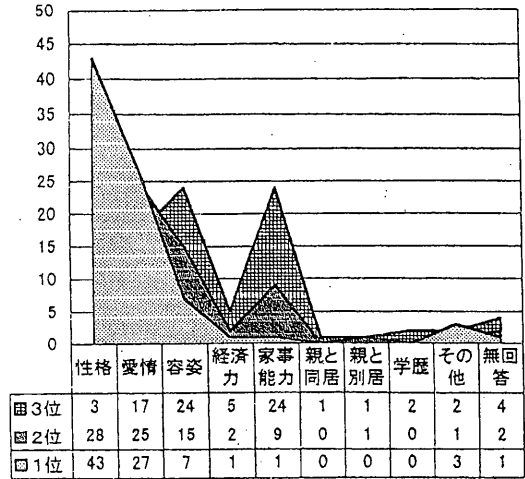


図3-2 配偶者を選ぶ際に重視すること（男子）

4) 交際中の異性の友人の有無

「現在、交際している異性の友人がいるか」という質問に対して、「いる」と回答した女子は31%、男子は13%であった（図4-1、図4-2）。「いる」の回答のうち、「その人との結婚を考えている」の回答は、女子55%、男子51%であった（図4-3、図4-4）。

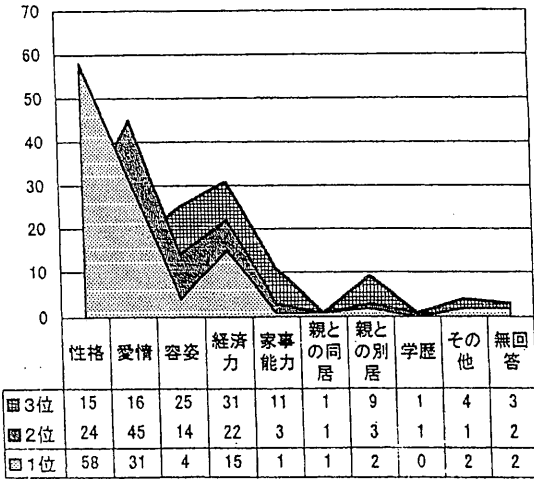


図3-1 配偶者を選ぶ際に重視すること（女子）

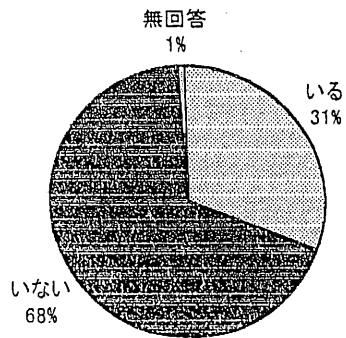


図4-1 交際中の異性の友人について（女子）

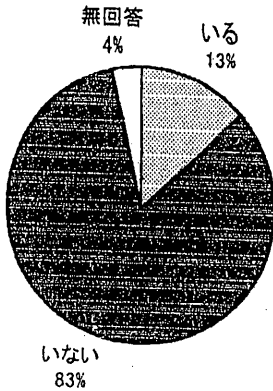


図4-2 交際の異性の友人について(男子)

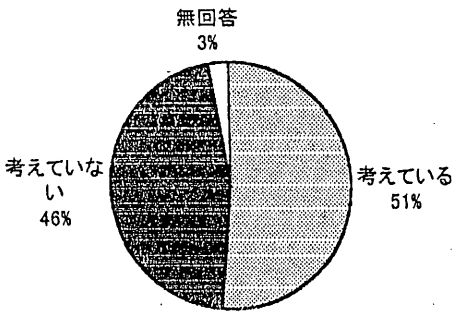


図4-3 交際の異性の友人と結婚を考えているか(女子)

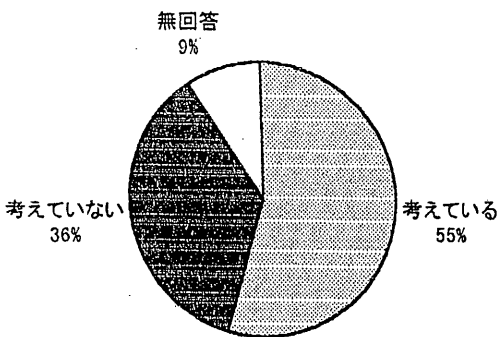


図4-4 交際の異性の友人と結婚を考えているか(男子)

5) 「子どもを希望」の有無

「子どもは欲しいか」という質問に対して、「欲しい」の回答は、女子70%、男子74%で大半の生徒が将来、子どもを欲しいと望んでいることがわかった(図5-1、図5-2)。また、「欲しくない」と回答した者は、女子10%、男子5%で、その理由としては、女子では「子どもが嫌いだから」「手がかかる、大変だから」「責任をもつのが嫌だから」「好きなことをしたいから」という記述があり、男子では「子どもが嫌いだから」「教育が難しそうだから」「めんどくさそうだから」といった記述があった。また、「子どもは何人位欲しいか」の質問に対する回答は、男女ともに2人、3人、1人といった順であった(図5-3、図5-4)。

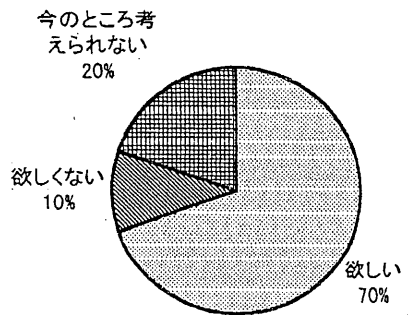


図5-1 子どもの希望の有無(女子)

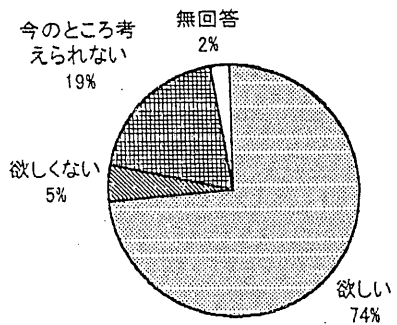


図5-2 子どもの希望の有無(男子)

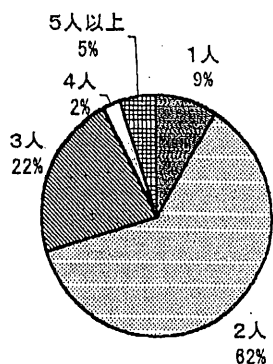


図5-3 子どもは何人位欲しいか(女子)

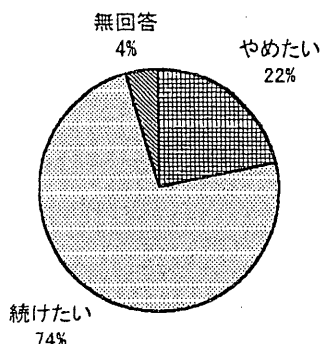


図6-1 結婚後の職業観(女子)

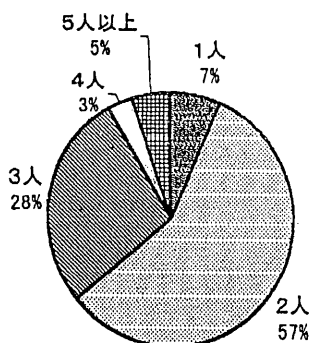


図5-4 子どもは何人位欲しいか(男子)

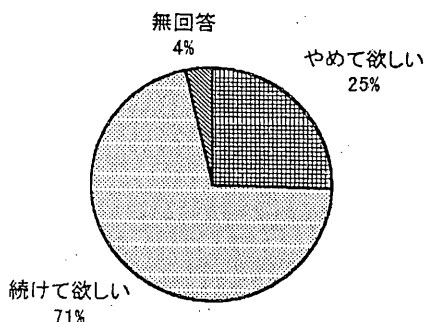


図6-2 結婚後の配偶者に対する職業観(男子)

6) 結婚後の職業観

結婚後の職業について、女子には自分自身のこと、男子には配偶者のことについて、「結婚後の職業をどう考えているか」と質問したところ、女子は74%が「続けたい」と回答し、男子は71%が配偶者に仕事を「続けて欲しい」の回答であった(図6-1、図6-2)。また、「どの位続けたいか」の質問に対しては、女子では「できるだけ長く」「定年まで」というのが全体の62%を占め、次いで「子どもができるまで」が19%であった。男子は配偶者の女性に対して53%が「好きだけ」仕事を続けて欲しいと回答し、次いで24%が「子どもができるまで」の回答であった(図6-3、図6-4)。

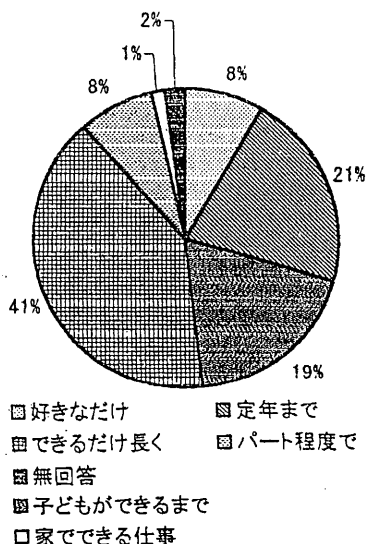


図6-3 結婚後どの位仕事を続けたいか(女子)

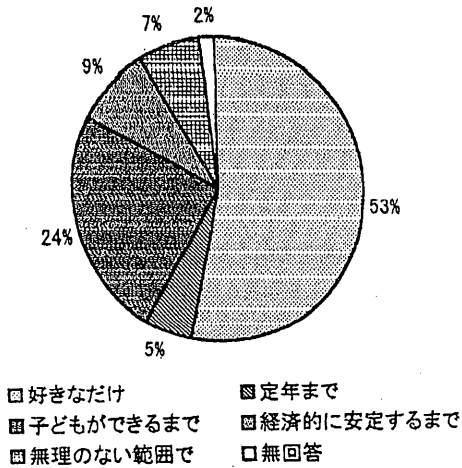


図6-4 結婚後、配偶者にどの位仕事を続けて欲しいか (男子)

7) 夫婦別姓について

「夫婦別姓についてどう思うか」の質問に対して、「良いと思う」と回答したのは女子36%、男子18%であった。「良くないと思う」と回答したのは、女子29%、男子36%で、「よくわからない」と回答したのは、女子34%、男子42%であった(図7-1、図7-2)。

「将来、夫婦別姓にしたいか」という質問に対して、「したい」と回答したのは、女子8%、男子4%と極めて低く、「したくない」と回答したのは、女子58%、男子52%であった(図7-3、図7-4)。別姓に「したくない」理由としては、女子の40.1%、男子の30.4%が「結婚し

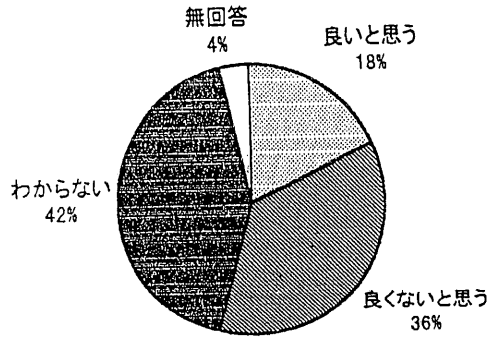


図7-2 夫婦別姓をどう思うか (男子)

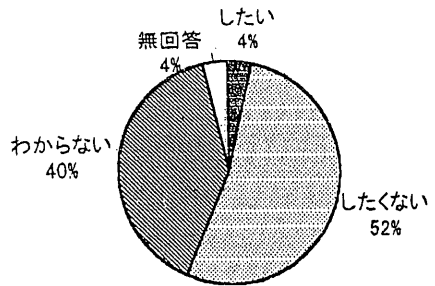


図7-3 将来、夫婦別姓にしたいか (女子)

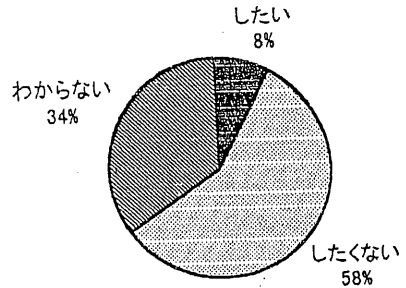


図7-4 将来、夫婦別姓にしたいか (男子)

たという証が欲しいから」と記述し、次いで、女子の34.7%、男子26.1%が「夫婦なら同姓を名乗るのがいい」と記述した。「わからない」と回答した者は、女子34%、男子40%で、「実際に結婚するときにならないと考えられないから」という記述が多くみられた。

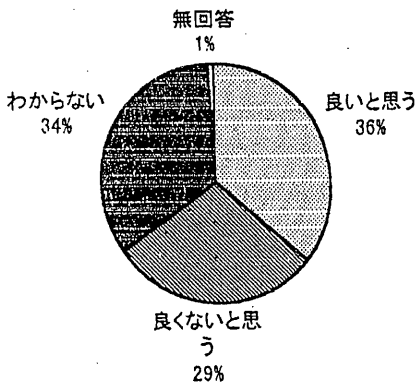


図7-1 夫婦別姓をどう思うか (女子)

考 察

1) 結婚希望の有無

「将来、結婚を望んでいる」の回答は男女とも約7割であったが、男子の方がやや結婚願望が高かった。「結婚を希望しない」の回答は、女子3%、男子8%とごくわずかであった。また、「結婚しても、しなくても、どちらでもよい」の回答は女子約3割、男子約2割で女子の方がやや上回った。「大学生の結婚観」²⁾と比較してみると、「将来、結婚したい」と回答した大学生女子は84%、大学生男子は71.5%であり、女子の場合は高校生よりやや上回っている。「結婚したくない」と回答した大学生女子は3%、大学生男子は2%となっており、高校生と同様、極めて少ないことがわかった。また、「どちらでもよい」と回答した大学生女子は13%、大学生男子は26.5%となっており、その理由として、女子では「自由でありたいから」「仕事を続けたいから」などがあげられ、男子では「相手に束縛されたくないから」などがあげられており、これらの理由は高校生にも共通している。

社会経済生産性本部の調査「平成11年度新入社員の意識と行動」³⁾の結婚観によると、「人生は楽しむもので、結婚や仕事が絶対とは思わない」の回答が28.8%となっており、高校生から新社会人にいたるまで、「結婚しなければならぬ」「結婚しなければ一人前でない」といった意見は減少し、「結婚しない人生があってもいいのではないか」という意識へと考えが変化していることがわかる。また、人口問題研究所「結婚に関する人口学的調査」「第10回結婚と出産に関する全国調査」⁴⁾によると、日本における結婚形態の変化は、1949年以前は見合い結婚が65%、恋愛結婚が22%であったのが、1965～69年では見合い結婚と恋愛結婚の割合がほぼ半々になり、1992年には見合い結婚が15.2%、恋愛結婚が82.8%であるという。これは、結婚が家と家の結びつきであるという伝統的な意識から、結婚は個人と個人の結びつきであるという新し

い意識への変化を明確に示すものであり、そのような変化の中で「結婚してこそ一人前」といった結婚観から、「結婚しても、しなくても、どちらでもよい」という結婚観、つまり結婚は個人の自由であり、結婚が人生の全てではないという意識が高まってきているのではないだろうか。

高校生（調査対象）の場合、男女とも約3分の2の生徒が「将来、結婚したい」と回答しているが、その一方で「結婚しても、しなくてもよい」と回答した生徒も少数おり、それは結婚をまだ身近な問題、つまり現実問題としてとらえていないのではないかと考えられるが、一方で、「人生は結婚がすべてである」と考えるのではなく、自分自身の基準を尊重し、個性を活かした生き方への志向が高まっているとも考えられる。それは、価値観の多様化、人生の生き方への多様化のあらわれではないだろうか。

2) 希望の結婚年齢

結婚を希望する年齢は、男女ともに25歳が最も多かった。「大学生の結婚観」²⁾では、大学生女子は25歳が最も多く、平均は26.5歳、大学生男子は30歳が最も多く、平均は28.1歳となっている。これらを比較すると、高校生より大学生の方が結婚を希望する年齢が高くなっている。これは、回答者の年齢の違いに加えて、学歴が高まるにつれ、晩婚化への傾向が強くなることを示しているのではないだろうか。

社会経済生産性本部の「平成11年度新入社員の意識と行動」³⁾の調査によると、「何歳くらいで結婚したいか」では、男女とも25～26歳が最も多くなっている。また、学歴別にみても、高校、短大卒では23～24歳、4年制大学卒では27～28歳、大学院卒では29～30歳が最も多くなっている。実際の結婚年齢を厚生省「人口動態統計」³⁾で調べると、1980年の初婚年齢の平均は妻25.2歳、夫27.8歳であったが、1998年では妻26.7歳、夫28.6歳となっており、男女とも初婚年齢が少しずつ上昇していることがわかる。ま

た、文部省「学校基本調査」³⁾によると、大学・短大への進学率は1988年では36.3%であったのが、1999年には49.1%となっている。これらのことから学歴と晩婚化は深く関与していると考えられる。

現在、晩婚化が進み、その背景として高学歴化や女性の社会進出があると考えられるが、高校生では男女とも約3分の2の生徒が将来結婚をしたいと回答しており、また、結婚希望年齢も25歳となっていることから、結婚観や価値観の多様化がみられる一方で、「結婚」や「適齢期」への意識が薄れていないということもわかった。

3) 配偶者を選ぶ際に重視すること

配偶者を選ぶ際は、男女とも「性格」、次いで「愛情」と回答していたが、これは家族関係を築いていくための当然の条件であることから、3番目以下の回答をみると、女子は「経済力」、男子は「家事能力」「容姿」を重視していることがわかる。「大学生の結婚観」²⁾においても同様の傾向がみられ、依然として女性は男性に「経済力」という生活の安定を求め、男性は女性に「家事能力」という生活の快適さを求めていることがわかった。

男女平等の意識が広まり、女性の社会進出が進んでいる現在、家事は夫婦が分担していくべきだ、という意識が高まっているのではないかと思われたが、実際は「男は仕事、女は家庭」という性別役割観が根強く存在していることがわかった。

4) 交際中の異性の友人の有無

交際中の異性の友人の有無について、「いる」と回答した女子は約3割、男子は約1割で、その異性の友人との結婚を考えている割合は男女とも約5割にのぼったが、将来結婚を望んでも、現在交際している友人と結婚したいかとなると、約半数の生徒はそこまで考えていないようである。高校生なら結婚を考えていなくても当然であり、結婚を現実問題として考えられ

る環境ではないだろうと考えられる。また、「大学生の結婚観」²⁾と比較すると、大学生では、交際中の異性の友人との結婚を考えている割合は女子が57.1%で、男子は41.7%となっており、約半数が結婚を考えているということは、高校生と大差はないようである。

福井商工会議所の「ブライダル市場」(調査対象：18歳以上の男女)³⁾によると、「恋愛と結婚は同じか」という質問に対して、「同じ」は20.5%、「ある程度同じ」は62.0%、「全く別」は17.5%の回答になっている。ここから約8割のひとが「恋愛＝結婚」という考えを持っていることがわかる。また、1)で述べたように、現在は恋愛結婚が主流となっていることから、やはり「恋愛＝結婚」と考える風潮が高いといえるだろう。

5) 子どもを希望の有無

現在、日本は超高齢社会を迎えるとともに、少子化も大きな社会的問題として取り上げられている。なぜ少子化が起きるのかについては様々な見方があると思うが、そのなかには、先に述べたような結婚観、人生観、価値観の多様化、男女の高学歴化、女性の社会進出などがあげられるだろう。ここでは実際に高校生がどのくらい子どもを欲しいと考えているかについて調査した。すると、「将来、子どもが欲しい」と回答した高校生は男女とも約7割であり、比較的多くの生徒が将来、子どもを育てたいと考えていることがわかった。また、「欲しくない」と回答した高校生女子は1割、男子は1割弱で、その理由として、男女とも「子どもが嫌いだから」「手がかかる、大変だから」「責任を持つのが嫌だから」「好きなことをしたいから」「面倒くさい」という記述がみられた。また、「子どもは何人位欲しいか」の質問に対して、高校生の男女とも、2人、3人、4人の順の回答となった。ここから、希望する子どもの数は2人以上が大半であるが、2000年の合計特殊出生率は1.35となっており⁵⁾、理想と現実には差

があることがわかる。これは、晩婚化や女性の社会進出が大きく影響していると考えられることから、今後、保育所や育児休暇などの出産や子育てに関する社会支援をより充実させていくことが重要な課題になるのではないだろうか。

出産や子育ては個人または夫婦の選択問題であり、そこには子どもを産まない自由も存在すると思う。しかし、個人の自由が謳歌され、この先、少子化がますます進行したら、社会経済や高齢者を支える面など、様々な面で不安定な社会になることが指摘されている。高校生にも子どもを産み・育てることに對して消極的な意見が出ているということは今後の少子化に少なからず影響を与えていくのではないだろうか。時代は多産多死から少産少死となり、子どもは“授かるもの”から“つくるもの”へと変化した。少子化をくい止めるためにただ「産めよ、増やせよ」というのではなく、これからの子どもの価値について深く考えなければならないと思う。

6) 結婚後の職業観

結婚後の職業観について、高校生女子の約7割が「結婚後も仕事を続けたい」と回答し、高校生男子の約7割が配偶者の女性に「結婚後も仕事を続けてほしい」と回答した。高校生女子で「仕事をやめたい」と回答したのは約2割で、高校生男子で「やめてほしい」と回答したのは3割弱であった。「大学生の結婚観」²⁾によると、「結婚後も仕事を続けたい」と回答した大学生女子は81.4%、配偶者の女性に「結婚後も仕事を続けてほしい」と回答した大学生男子は70.4%であった。高校生と大学生を比較すると、男子ではほぼ同じ数値であったが、女子では大学生の方が「結婚後も仕事を続けたい」と考える割合が多い。また、「どのくらい仕事を続けたいか」の回答は、高校生女子では「できるだけ長く」が約4割、「定年まで」が約2割、「子どもができるまで」が約2割で、「パート程度で」が約2割であった。高校生男子は配偶者の女性

に對して、「好きだけ仕事を続けてほしい」が約5割、「子どもができるまで」が2割強、「経済的に安定するまで」が約1割となり、「定年まで」は1割に満たなかった。前掲資料²⁾によると、大学生女子は結婚後の仕事を「定年まで続けたい」が45.6%、「できるだけ長く続けたい」が22.2%、「子どもができるまで続けたい」は19.6%であった。大学生男子では配偶者の女性に對して、結婚後も仕事を「好きだけ続けてほしい」としたのが68.8%、「定年まで続けてほしい」が14.5%、「子どもができるまで続けてほしい」が11.6%であった。これらのデータを比較すると、高校生と大学生で大きな差がみられた。女子では「定年まで働きたい」とした大学生が5割近くいたのに対し、高校生では約2割と低い。男子では配偶者の女性に「定年まで働いてほしい」とした大学生が1割強であったのに対し、高校生では1割に満たなかった。また、「子どもができるまで働いてほしい」とした大学生男子は約1割であったのに対し、高校生男子では2割強と高くなっている。このことから、大学生より高校生において、「結婚したら仕事をやめる」や「子どもができたなら、女性は仕事をやめる」といった性別役割観を示す意見が多くみられた。また、学歴が高くなるほど「結婚後も仕事を続ける、続けてほしい」と考える割合が増えていることは、男女が互いに対等な関係を持つべきという意識が高まっているためではないかと考えられる。

7) 夫婦別姓

夫婦が別々の姓を名乗ることができる「選択的夫婦別姓」に向けた法改正は1991年から審議が開始されている。選択的夫婦別姓に関する意識の変化として内閣府の世論調査⁶⁾の結果で、「結婚前の姓を通称として使えるように法改正することはかまわない」という意見は1996年6月では22.5%、2001年5月では23.0%と大きな変化はみられていないが、「夫婦は必ず同じ姓を名乗るべきで、法改正の必要はない」という

意見は1996年6月には39.8%であったのが2001年5月には29.9%に減少し、「夫婦がそれぞれ結婚前の姓を名乗ることができるよう法改正してもかまわない」という意見は1996年6月の32.5%から2001年5月には42.1%に増加している。このように、夫婦別姓を容認する動きは年々高まってきている。

高校生の夫婦別姓への意識は、「良いと思う」が女子約4割、男子約2割で女子の方がやや高いことがわかった。また、「良くないと思う」は女子約3割、男子約4割で、ここから男子は女子に比べて夫婦別姓に対して賛成している人が少ないことがわかる。しかし、「将来、夫婦別姓にしたいか」という質問に対して「したい」は女子で8%、男子で4%と男女とも極めて低い結果となり、「したくない」は女子で約6割、男子で約5割という結果になった。このことから、「夫婦別姓」を客観的にみると「良い」と思うが、いざ自分のこととなると、別姓にはしたくないと考える生徒が多いことがわかる。夫婦別姓にしたくない理由としては、「結婚したという証がほしいから」「夫婦なら同姓を名乗るべき」という記述が多くみられ、「別姓にすることで夫婦の絆が弱まるのではないか」という記述もみられた。また、「子どもが混乱するから」という記述もあった。「わからない」と回答する生徒も多く、「実際に結婚する時にならないと考えられない」という意見が多かった。

女性の社会進出が進み、結婚後も結婚前の姓でいたいと考える女性が増えてきている。子どもがどちらの姓になるのかなど、様々な面での混乱は予想されるが、同一姓にすることこそが家族の絆(証)であると考えのではなく、別姓であっても夫婦がお互いを個人として尊重する以上、家族としての絆は変わらずに存在する、という考え方もある。別姓は夫婦のあり方、生き方のひとつの選択肢として、今後広く受け入れられるべきだと思う。

まとめ

本調査の結果から、結婚は恋愛結婚、愛情がテーマ(個性を生かした生き方、自分らしさを大切にすること)になる一方で、根強く残る性別役割観、夫婦別姓に対する消極的意見の多さが見られ、個人的志向と家意識といった相反する意識の存在を読み取ることができた。しかし、夫婦別姓に消極的な理由として、家族との精神的結びつきを大切にしたいという意見が多くあげられたことから、家族員相互の愛情を大切にしたいとする気持ちが強く表れていることがわかった。そして、多くの生徒が愛情を基にした家庭を築き、子どもを産み、育てたいとしていることから、今、家庭に求められていることは愛情であるといえるだろう。愛情は家庭の機能において、最も重要な機能のひとつである。愛情があってこそ、思いやりの心が育ち、子どもの社会的成長やアイデンティティの獲得、おとなの情緒的な安定が得られると思うからである。

結婚は青年期のテーマとしてとらえられることが多いと思われるが、結婚は若い男女だけの問題ではなく、親子の問題、家族の問題、老いの問題など多くの問題を持つものであり、そこには人間として生きること、人間としてのあり方の方の本質に関わる問題が多くあるように思う。厚生省の「人口動態統計(概数)」⁷⁾によると、2000年に結婚したカップルは前年より大幅に増えて79,814組となり、過去20年間で最も多い結婚件数となった。しかし、一方で離婚件数は26,425組と10年連続で増加し、過去最多を更新した。「熟年離婚」の増加も目立ったという。結婚や離婚が多くみられる一方で、未婚化・晩婚化も進み、結婚をしないという若者も増加している。成人しても親元に同居し、親の経済力に甘えるという、いわゆるパラサイトシングルの増加も指摘されている⁸⁾。これらは、高学歴化が進んだことで、自分の可能性を試したい、自分にできる何かを探したい、という自己実現に懸命になる若者が増加したことが影響してい

るのではないだろうか。また、児童虐待、働き盛りの男性や老人の自殺が増加し、そこから家族の絆や重みの低下が感じられる。そこで今、家族に求められているものは何か、家族の理想的なあり方について、家庭の機能を考察することを中心にして、今後さらに研究を進めていきたい。

謝 辞

本研究を進めるにあたり、御指導頂きました渡辺純子教授に心より感謝いたします。また、アンケートに御協力くださいました高校生の皆さんに厚く御礼申し上げます。

引用文献

- 1) 日本家庭科教育学会 総合 家庭科事典
同文書院 (1978)
- 2) 斉藤夏子：東京家政大学卒業論文 (1997)
- 3) 食品流通情報センター 若者ライフスタイル資料集2000 文栄社 (2000)
- 4) 山田昌弘：結婚の社会学 丸善 (1996)
- 5) 『朝日新聞』(2001年6月21日)
- 6) 『読売新聞』(2001年8月5日)
- 7) 『日本経済新聞』(2001年6月21日)
- 8) 山田昌弘：パラサイト・シングルの時代
筑摩書房 (1999)